

市民・県民フォーラムの記録

実施概要

日 時：平成 28 年 3 月 19 日（土）16：00～18：00

場 所：沖縄産業支援センター 1 階 大ホール

テーマ：跡地利用への期待

内 容：①那覇軍港の歴史と跡地利用に向けて（PR 映像上映）

・那覇軍港にかつてあった「垣花」の歴史と跡地利用に向けた取り組みを映像で紹介

②「那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会」活動紹介

・発足からこれまでの活動内容及び今後の活動についての紹介

「発表者」

我那覇 茂（那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会）

③パネルディスカッション

・学識者や地権者、行政といった様々な視点から「跡地利用への期待」について討論

「コーディネーター」

池田 孝之（琉球大学名誉教授）

「パネリスト」

下地 芳郎（琉球大学観光産業科学部教授）

我那覇 祥義（那覇軍用地等地主会会長）

上原 政宏（那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会）

下地 正之（沖縄県企画部参事）

城間 幹子（那覇市長）



議事概要

開会

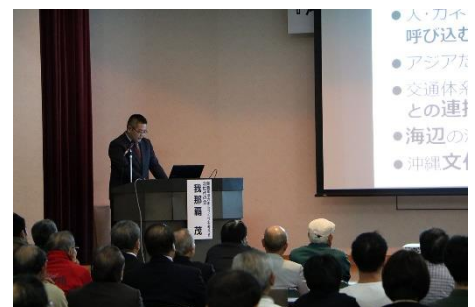
・那覇市長 城間 幹子 あいさつ

1 那覇軍港の歴史と跡地利用に向けて（PR 映像上映）

2 「那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会」活動紹介

・我那覇 茂(那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会)による紹介

3 パネルディスカッション



司 会 者

お待たせいたしました。

初めに、本日のパネリストの皆様をご紹介させていただきます。まず、本日の進行を務めていただきますのは、琉球大学名誉教授、池田孝之様です。（拍手）

続きまして、舞台中央から、琉球大学観光産業科学部観光科学科教授、下地芳郎様。（拍手）

那覇軍用地等地主会会長、我那覇祥義様。（拍手）

那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会、上原政宏様。（拍手）

沖縄県企画部参事、下地正之様。（拍手）

最後に、那覇市長、城間幹子でございます。（拍手）

それでは、よろしくお願いいたします。

コ-ディネ-ター

池 田 孝 之

こんにちは。私のほうで進行をさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

今日は、少し曇り模様で雨もどうかと心配でしたが、たくさんの方に入っていただきありがとうございます。地主会の方がわりと中心かと思いますが、幅広くいろいろな方と一緒に議論できればと思っておりますのでよろしくお願いします。

今日の進め方ですけれども、パンフレット等にも書いてありますけれども、5名の方に登壇していただいていますので、まず5名の方、お1人ずつ、時間は7～8分ぐらいの持ち時間で、それぞれ用意したものを発表していただきます。

どういう発表かという、今回の那覇軍港のまちづくりフォーラムの『沖縄の発展を目指して』ということではありますが、ここのパンフレットの左側に初回テーマ「跡地利用への期待」と書いてありまして、ということは、今日が始まりということで第1回目ということなのですね。含みとしてはまだまだ2回、3回と続けていく出発点なものですから、今日いきなり深掘りというふうには多分ならないと思います。ですから、まず、那覇軍港は何なのかと、その理解から始まって、でも今の時点で考えられる可能性をぜひ考えてみたいと思っていますので、時間は限りなく少ないと思うので結構課題も残るかもしれませんが、それはまた次回へつないでということで、初回という形で少し気楽にいきましょうと思っています。

パンフレットにもありますが、お2人下地さんがいらっしゃるの、言い方は大体、僕は「さん」付なのですが、下地さん、下地さんと言にくいので、下地先生と下地さんという形で、市長は城間さんというよりは市長と呼ばせていただいて、我那覇さん、上原さんはそれぞれ「さん」づけで呼ばせていただきたいと思いますので、左側から順番にまずご発表をいただいて、それから壇上で少し議論をしてもらいます。議論の筋は、そんなにたくさんは時間がないのでできませんので、やはり那覇軍港は何なのか歴史も含めて、先ほど映像でもありましたが、那覇軍港の特徴、特色をまず理解したい、それが出発点で、そういうものを持ちながら、可能性といえますか、那覇軍港で何ができるのか、可能性について2番目に議論して、最後はこれが沖縄県であったり中南部であったり、場合によっては国際的にどのように発展的に役に立つか、そういうふうに少し話を広げられればなと思っています。

時間は1時間半と限られていますけれども、残り時間を使いながら、皆さんに向けて少し質問をいただいて、そのキャッチボールができればなと思っていますのでよろしくお願いいたします。

それでは早速、下地先生からよろしくお願いいたします。



パネリスト 下地 芳郎



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました琉球大学観光産業科学部の下地です。今日は、この那覇軍港まちづくりフォーラム『沖縄の発展を目指して』、初回テーマ「跡地利用への期待」ということで呼んでいただきました。私自身も大変興味のあるテーマですし、今日はほかのパネリストも専門家がいらっしゃいますので、私自身は沖縄観光を幅広く見ている立場から那覇軍港の跡地利用への期待というものを少し考えてみたいと思います。

最初にPR映像を見せていただきましたが、幾つもの中にヒントがあったと思いますし、その後の次世代の会の活動紹介の中でも、もう既にいろんな活動がされているとい

うことですので、もしかしたら既に私がお話をすることは皆さんの中で議論がされていることかもしれませんが、私なりの考えということで紹介をしたいと思います。時間も限られていますので、3点、跡地利用への期待についてお話をしたいと思います。

最初にPR映像にもありましたけれども、やはり那覇軍港を考える場合には、那覇の港が果たしてきた歴史的な役割を改めて検証する必要があるのではないかと。このお話をいただいてから、かつて琉球王国時代、あとは沖縄県になってから、戦前・戦後、那覇の港がどう変わってきたのかということ改めて少し読みましたが、琉球王国の時代に那覇の港は、言うまでもなく外との玄関口であったわけですし、先ほどの映像にもちょっと写真がありましたけれども、海外の人たちが見た那覇の港、那覇から見る那覇の街並みが非常に美しい、美(び)という、美(ちゅら)と言えばいいと思いますけれども、この美(び)という視点がやはり沖縄、特に那覇の港から入ってくるポイントとしてはあるのかなと。かつて琉球が誇っていた、沖縄が戦前に誇っていた美という

ものに対して、どういうふうに関後、考えていくのかというのはとても大きな視点だと思っております。

もう1つは、沖縄観光の現状と課題を踏まえて、この那覇軍港エリアをどう考えていくのかということだと思いますが、皆さんご存じのように、沖縄観光は、現在は非常に好調に推移しております。ただ私自身は若干心配性なところもありますけれども、観光は常にいい時代ばかりではないわけですね。これまでも2000年にサミットがあって、これからというときに2001年の米国同時多発テロ事件で相当な影響を受けています。その後もさまざまな機会に沖縄観光、沖縄観光に限りませんが、世界の観光は非常に影響を受けてきていると。

そうした状況もありますから、長いスパンで考えていく中においては、観光は一時停滞する、もしくは非常に苦しい時期も想定をする。そういったことを想定しないで常に伸びていくと考えるのは非常に危険なところもありますので、観光を考える場合には、観光のリスクマネジメントと、観光以外の産業なり、様々な視点で観光をフォローする取り組みが非常に必要になってきます。

那覇市の観光については、昨年、那覇市観光基本計画が策定されております。この策定にも少しかわらせていただきました。那覇市の観光が目指すキーワードは、「人も、まちも活きいき、美ら島の観光交流都市」となっております。この中にある交流が最大のポイントになるのは皆さんも同じ考えだと思います。人が行き交うわけですから、すれ違いではなく交流をしていくと、そういった場にこのエリアをどうやってつくっていくのかはとても大事だと思っております。

3点目の那覇軍港跡地の価値についてですけれども、これは言うまでもなく歴史的な背景、さらには現在的那覇空港との近接性を考えれば、那覇軍港だけで考えるのではなくて、もう少し俯瞰して空港エリア、港エリア、さらには内陸エリア、もう少し広げた視点で考える必要があるのかなと思っております。現在は那覇軍港の跡利用という形での絵の姿を議論されていると思いますけれども、できればもう少し広げてみて、どういった絵が描けるのかと、那覇市の計画の中でもウォーターフロントゾーンというところもありますけれども、そういう視点から離れてみて、もう一度、歴史的な視点も含めて、これからのエリアの考えをまとめてみたいのではないかと。

そのときには景観が非常に重要な視点となることは最初に申し上げたとおりです。この点は池田先生のほうが専門家ですけれども、やはり沖縄が戦後失ってしまった景観、美しさをどう次世代に復活をさせていくのかは大事な視点だと思っております。

那覇軍港の跡地については、観光面からの利用のメリットは言うまでもなく幾つも考えられますし、ビジネスの面からいっても那覇空港との連携という形でさまざまな可能性があると思っております。さらには慶良間を含む周辺離島との連携をどう図るのか。都市部分と非常に自然の美しい離島エリアがこれだけ近いところにあるリゾートはそんなにはありませんので、那覇の場合には先ほどの土地計画の話に関しては、もう少し広く今度は慶良間エリアも含めて見る必要があるというふうに思っております。

そうした意味で、私自身は沖縄観光の未来を考える場合に、これまで戦後、復帰後、つくってきたビーチリゾートのイメージと、その後、復活してきた文化リゾートという新しい、もともとこれが沖縄観光のビーチリゾート以前の本来の姿なわけですが、この2つを強化すると同時に、新しい時代に向けてのビジネスリゾート、この3つのトリプルリゾートとしての沖縄観光の発展可能性を考える必要があると思っております。そのトリプルリゾートにおいて、極めて重要な地域が那覇軍港を含む空港隣接地域であることは間違いありません。歴史的な経緯、さらには現状を含めても、ここを拠点としてどういった将来像を描くのかは大事だと思っております。

そうした意味で、今後、どうすべきか、ということですけど、私自身は今できることからやる必要があると、2028年の後のことを考えることも大事ですけれども、1つ例を言えば、先ほど映像にもありました御物城というのが今もちょっとした小島で残っております。御物城の価値を今の子どもたちを含めて、観光よりも教育的な視点が大きいと思います。那覇の歴史を振り返る意味で、御物城の小島を一部開放なり、何らかの形で子どもたちに見せていく御物城学習ツアーみたいなものから始めてみるのが子どもたちの目線を将来に向けて引っ張る大きな視点だと思います。

できればその中で復元をしていく計画を今のうちからそういう計画まで含めて考えれば、歴史的な意味合いがあるところですので、これからつくろうとする新しいまちづくりと昔の復元という2つの視点が大事だと思っております。

もう1つは、先ほどもありました返還が早くても2028年以降、そういうことを考えますと、「沖縄21世紀ビジョン」がゴールとしているのが2030年です。2030年の沖縄21世紀ビジョンに向けてどういうことをやろうかというのが詰められていますけれども、その先の話ですので、個

人的な意見ではありますが、今の地主の皆さんを中心とした次世代の会に加えて、場合によっては中高生、大学生を含めて、地主さん以外の幅広い若い人たちを交えた、ある意味「未来会」みたいな形も同時並行で進めていくと「次世代の会」の皆さんが考えたことを「未来会」の若者に伝え、さらに彼らが今の時代に応じた情報発信で世界に広めていくことが可能になると思っております。

少し早口になりましたけれども、以上で私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

コーディネーター
池田 孝之

どうもありがとうございました。

結構多面的にふれていただいて、歴史的な価値、景観、美しさ、さらには、もちろんウォーターフロントであったり観光資源であったり、さらにはビーチ、ビジネスのリゾート、そういうものが非常にあるのだと、それに子どもたち、まだ小さい子どもたちも含めて学習も兼ねたツアーもここでは可能ではなかろうかとか、あとは若い人もどんどん入れた未来の会といいますか、そういう提案いろいろアイデアも含めてありがとうございました。

それでは、我那覇会長、よろしくお願いいたします。

パネリスト
我那覇 祥義



ただいま紹介されました我那覇祥義です。垣花出身です。那覇軍用地等地主会の会長を務めております。2028年度と、またはその後、那覇軍港は全面返還となります。軍港地主 1,013 名の財産権を保護し、福利厚生増進を見極めながら那覇軍港跡地利用に取り組んでおります。

垣花は、昭和 19 年 10 月 10 日の空襲で焦土と化してしまいました。故郷がなくなり、安謝・若狭に移動を余儀なくされております。那覇軍港は 70 年間と、今も米軍基地ですが、あと 12 年後か、その後に返還されるようになりますと、今から返還跡地利用のまちづくりを本気で取り組む必要があります。ここ那覇軍港がアジア・環太平洋地

域の経済情勢を踏まえ、跡地利用を進めたら沖縄の自立経済発展への心臓部の箇所だけに、経済界の期待が大きいのです。

戦前はもちろんのこと、今も那覇軍港の周辺の繁栄を見ると明らかなように、それに慶良間諸島のホエールウォッチングや最適な西海岸に位置し、沖縄の観光、経済発展の要となり、人・物・金、情報がここに集まるようになります。那覇軍港の地の利は、県都那覇市が持つ軍港、浦添の西海岸に面したキャンプ・キンザーの港湾、県那覇港湾組合が人口 100 万人相当の政令指定都市並みのまちづくりと一緒に返還跡地利用の枠組みができるとアジア・環太平洋地域の世界経済情報を持つ「交易・交流」都市の実現も夢ではないと思います。この県都那覇市・浦添市を結び地理的条件は、沖縄全体の観光経済発展へとつなげる本拠地であると誇りに思っております。

次年度から計画づくりの段階である合意形成活動の第 2 ステージへの移行となりますが、地主は軍港返還跡地利用の「アジア国際平和経済投資構想(案)」の中で、「M I C E 型」の誘致が必要であり、M I C E 型の共同使用は、沖縄の自立経済の発展を早める道ではないかと思っております。

国は 21 世紀の万国津梁の形成云々、沖縄振興に取り組むとなっております。那覇軍港は琉球王府の時代から、万国津梁の形成で自立経済を発展させてきました。那覇軍港跡地利用まちづくりは、国の基本方針である 21 世紀の万国津梁の M I C E 型、アジア国際平和経済投資構想(案)を先駆ける必要があります。国は沖縄の自立経済の発展を目指す新生沖縄と再生沖縄を支援しています。まさしく両方を兼ね備えた県都那覇市の軍港跡地の利用がその役割を果たすことができるものと考えます。

那覇軍港跡地利用は、21 世紀の交易・交流ゾーン、ウォーターフロントゾーンの都市としてのポテンシャルの高さにあります。しかし、国は、2021 年度が計画期間とするとあり、猶予あと 5 年の期間を有するのみで、基地の共同使用を念頭に置く必要があると思います。

市場経済がグローバルに移った国際環境で沖縄の自立経済の発展をしようものなら、県都那覇市が突出した都市として牽引することが望ましい。それからすると、今までは市自体が返還跡地利用のまちづくりに遠慮がちな行政であったのではないかなと感じます。よく耳にすることです

が、沖縄県に国庫 10 兆円の財貨を投じて沖縄の経済成長は見えてこない。県民所得が全国で最低どころか、我が国に貢献もないよねと言われています。これは行政の均衡予算の概念が原因ではないか。県 21 世紀ビジョンの第 7 章、中南部都市圏駐留軍用地跡地利用を含め、返還日や予算、政治絡みなどを除外してみても真摯に沖縄全島で観光や自立経済の核となり、近接市町村に豊かさをもたらす本拠地となる箇所は、1 力所しかない。返還基地である県都那覇市の軍港と浦添市キャンプ・キンザー、西海岸港湾を結ぶ県的那覇港湾組合ではないでしょうか。だとすれば、返還跡地利用を推進する第 2 ステージで積極的に取り組むことで、国の定めのある 2021 年度の計画期間にたどり着くのではないかと。那覇軍港の返還跡地利用について、地主 1 人当たりの土地が小さく収入は少ない。みんなで協力して大きな土地を生み出し、その活用に安定した収入を得る仕組みも必要となります。軍用地主は不利益とならないためにも次の要請行動を行います。先祖からの土地を売らずに、貸す方向へと。

国有地 37.6%を道路や公園・緑地等の公共用地への充当をお願いする。

軍用地主の減歩率を低めに講じてほしいという希望をします。

中南部都市圏広域構想想定を視野に入れた M I C E 型アジア国際平和経済投資構想(案)を誘致するため、共同使用の推進をする。

那覇軍港跡地利用を生かし、県都那覇市が突出した那覇市として牽引する沖縄県の観光と自立経済発展の仕組みの調査委員会の設置をお願いしたい。今後は地主、那覇市及び関係者による強力な連携体制の構築によるすばらしい跡地利用を促進していきたいと、こういうふうを考えております。終わります。

コ－テ－ィネ－ター
池田 孝之

ありがとうございました。

地主会の会長ということもあっていろいろとかなり突っ込んだ話もあったと思います。大きくは那覇軍港、キャンプ・キンザーと浦添も含めて、この西海岸地域が一つにまとまって動く必要があるのではないかと。そして中南部都市圏を含めた地域は 100 万都市の政令指定都市になるぐらいのポテンシャルがある、そういう広い見地で交易・交流を含めた展望を描くべきではないかというスタンスだと思っています。

そういう広い発想から、あとは具体的には国有地も活用する話だとか、それから軍民共用的なことも戦略として考える必要もあるとか、さらには地主会そのものが細切れの細かい土地を持っているので、これを共同で管理してやっていく。こういうような考え方も必要ではないかという非常に具体的な話もありました。

第 1 ステージという段階から第 2 ステージ是那覇市と一緒に、これから検討の時期に入っていきますので、その中でこういうものをしっかり受け止めて考えていく必要があるというご提案だったと思います。それでは、上原さん、よろしくお願いします。

パネリスト
上原 政宏



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介に預かりました上原政宏と申します。

本日は「那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会」以下名称を略して「次世代の会」と呼称させていただきます。前述を代表して、この場に参加しております。また、同時に日常は「垣花未来創造会」会長を拝命し、理事、代議員とともに将来の垣花を担う役割を持った組織として活動を行っています。

「次世代の会」につきましては、司会の方からもご説明がありましたが、若干補足させていただきます。先ほどのスライドによる活動報告がございましたように、那覇市さん

の支援を得て、「垣花未来創造会」を代表した 6 名の会員にて発足をいたしました。次世代と言っても会員の年齢層は 40 代、50 代、60 代前半の構成となり、決して若くはないのですが、現在の地権者の方々の年齢層において、熟年層が中枢をなし、将来のまちづくりに向けた取り組みを担っておりました。その方々に打って変わる次の地権者としての意味合いを持っています。

実際の那覇軍港の返還は早くても 2028 年度、またはその後となっています。まちづくりが始まるまで早くてもあと 20 年はかかるわけです。そのとき、自分たち若い世代がまちづくりの主役となっていけないといけないと思います。来るべきに備え、地主になる前から見聞を広め、知識を

高めて、地権者の方々に最良の土地の有効活用の手助けができるよう努めること、また、地権者先輩方の意志を引き継ぎ、私たちの次の若い世代への引き継ぎも考慮に入れた人材育成も担っております。以上のことを踏まえ、活動する組織として立ち上げた趣旨にございます。

それでは、本日の主題といたしまして、「跡地利用の検討に向けた次世代としての考え方」と「今後の活動方針」を中心に発言を行いたいと思います。

手始めに「跡地利用の検討に向けた私たちの考え」について、2点ほど申し上げたいと思います。

まず、1点目は、「ひとつの計画に固執するのではなく、周りの環境の変化に応じて柔軟に考える」ことです。例を言えば、アワセゴルフ場跡地利用計画においては、過去にゴルフ場運営の計画や今でも記憶に新しい大学院大学の誘致計画が大きく新聞紙上で取り上げられた時期がございましたが、最終的には全国でも有数な大規模商業施設の誕生と同じく全国規模の医療法人による大型医療施設の近々の開業、北中城村による屋内スポーツ施設の建築計画に打って変わりました。そのように近年の社会経済情勢の変化は目まぐるしく、沖縄県においても那覇空港滑走路増設、浦添市西海岸開発計画、大型MICE施設、都市モノレール延伸、鉄軌道計画、旭橋再開発等と大きく変化をしています。また、他の駐留軍用地の跡地計画もクローズアップされています。宜野湾市では、キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地跡及び普天間飛行場跡地利用計画、浦添市ではキャンプ・キンザー跡地利用計画等がございます。それらの先行する跡地利用計画のよいところを十分に見た上で考えることと、それらと重複しないような機能分担、または連携も考慮に入れ、沖縄県全体の発展につながるようなまちづくりをしたいと思います。

2点目は、「周辺を含めた一体的なまちづくり」を考えることです。那覇軍港の面積は56haと小さいながら港を有しています。それがポテンシャルを感じさせ、他の駐留軍用地にない最大の特徴となっています。後背地には奥武山公園、県都那覇市にあり、飲食店や宿泊施設が充実した恵まれた周辺環境を持っています。特に港は最大の強みであり対岸や周辺環境を含めたウォーターフロントとしてのまちづくりを考えていきます。

次に、「今後の活動の基本方針」におきましては、地主会との意見交換会に向けた活動の実施を重視します。と申しますのは、次世代の会立ち上げのころは、地権者の方々に対し、私たちの趣旨が十分に伝わってなく、厳しい風当たりがありました。先日開催された那覇市主催による地主会理事会との合同意見交換会にて、今後の跡地利用に対して若い人の意見をぶつけてほしいとの発言や歩調を合わせて一緒に進めたいとの声があり、ここにきて、2年半活動してきた跡地利用を検討する組織として認められました。また、同意見交換会の場にて、次年度から跡地利用計画の策定に移ることが決議されたことを受け、次世代の会では、地主会との視点を変え、特にアジアのみならず、世界との交流を考えたとき、何が必要か掘り下げて検討したいと思います。百聞は一見に如かず、国内、または海外での先進施設の事例視察や他の組織との意見交換、専門家支援による勉強を行いたいと思います。そして自分たちの考えをまとめ、跡地利用に対する情報発信も含め地主会との連携強化に取り組みたいと思います。

あわせて、離れた地域に住む垣花出身者の合意形成を積極的に実施したいと思います。また、跡地利用計画を策定するステージに移行するにおいて、多方面での視点による意見が必要になり、現在のメンバー6名では少数との判断になります。よって、少なくとも倍の人数が必要と考え補強を実施したいと思います。

最後になりますが、今後も那覇市さんのご支援を賜り、地主会を補完できるように各人がスキルを上げて取り組んでいきたいと思っています。どうもご清聴ありがとうございました。

コ-ディネ-ター
池田 孝之

どうもありがとうございました。次世代の会、若手といっても地主会の特徴として、ある程度の年齢の方が実は若手ということですが、人数もこれから頑張ってふやして、なおかつそれは地主会の本体のほうからも認知され、非常に役割が高くなっているのだと、こういう実感の話だと思っています。

あわせて、計画づくりは非常に柔軟にやっていくのだと、経済やいろいろな環境の変化に対応しながらこういう姿勢で取り組んでいく、そのための情報収集、勉強会を含めてしっかりやっていき視野を広げ、アジアや世界との交流も広い視点からしっかりやっていきたいという意気込みを言っていました。

同時に、那覇軍港の特徴は、ウォーターフロント、港、これがほかにはない一番の特色なので、これをやはり生かすべきだと、こういうご指摘だったと思います。ありがとうございました。

それでは、下地さん、よろしくお願いいたします。

パネリスト
下地 正之

ハイサイ、こんにちは。沖縄県の下地といいます。よろしくお願いいたします。

私は、今までは各パネラーの皆様方、那覇軍港の将来展望という形でお話しされていましたが、やはり今後の跡地利用を考えるにあたっては、これまでの跡地利用の取り組みがどうだったかということもちょっと振り返ってみる必要があるのではないかとということで、これまでの県の跡地利用の取り組みを紹介し、その後、それを那覇軍港の跡地利用にどうつなげていくかという視点で説明させていただきます。

その前に、私の紹介ですが、専門は建築、都市計画という部署を渡ってきました。都市計画は区画整理課にいました。当時は平成 5 年、ちょうど那覇新都心地区が起工承諾をして造成工事をしているところです。そのときに文化財が出てきてそれをどうするかと、なかなか仮換地指定までこぎ着けることが厳しいような状況のときでした。

また、都市計画行政でいえば景観形成行政にも携わりました。ただ、この建築行政、都市計画行政に加えて、県庁人生で長いのが跡地利用行政です。実は通算 10 年目に入ります。なので、私の知っている範囲でこれまでの取り組みが進められてきていると思います。

さかのぼって、昭和 52 年、もちろん私が県庁に入る前ですが、那覇新都心地区・牧港住宅地区の返還が開始された年です。そのころは一括返還ではなく、細切れ返還ということで、10 年ぐらいかけて返還が進むわけです。県、市は跡地利用を具体化していくためには新たな制度的枠組みが必要なのだと、これまでの現行制度では厳しいのだということを訴えていくわけです。

そこで県は昭和 53 年に新たな跡地利用に関する法律、軍用地の転用及び跡地利用の円滑な推進に関する特別措置に関する県要綱案をつくります。議員立法という形で提案させていただくわけですが、ところがなかなか国のハードルは高く、国会審議では 3 回の廃案、そして 4 回目に修正をかけて、平成 7 年 6 月にやっと成立したのが軍転特措法ということです。

軍転特措法という初めて跡地利用の枠組みの法律ができたわけですが、内容については必ずしも十分なものではなかったという評価でした。

その後、恩納村の通信施設で P C B が発見されると、軍転特措法の目玉は、返還されて給付が支給されるということだったのですが、この返還後 3 年の間に P C B を除去する期間も含まれていて、実質給付期間が 1 年足らずとか、そういう課題もあったと。

その後、平成 8 年には S A C O の返還合意で普天間飛行場の跡地利用の返還合意が示された。そういった大規模な跡地が返還される、また課題がある。それについては軍転特措法では十分ではないということで、さらに軍転特措法の改正、あるいは新たな制度の確立について、また国に求めていくわけです。その新たな制度の確立の中に、今、那覇軍港が抱えている課題の 1 つである国有財産の活用も盛り込まれておりました。

そういう動きの中で、私は平成 11 年に跡地利用の担当になるわけですが、そのときには普天間飛行場跡地をモデルとした跡地利用の課題と対応方針についてまとめ、それをベースに沖縄振興特別措置法の中に跡地利用の特別規定が盛り込まれたわけです。ということで跡地利用に関する法律がそのとき軍転特措法と沖縄振興特別措置法の 1 つの章で二本立てになったということです。

そして動き出すわけですが、やはりまだ課題は残っていた。その後、キャンプ・桑江の北側地区で新しい法律に基づく特定給付金が支給された後、要するに引き渡しされた後も汚染物質がどんどん出てくる。あるいは平成 18 年には嘉手納以南の大規模な返還が合意されて、いわゆる 2 プラス 2 において返還が合意された。

そういったことにも対応できるには、やはりこの制度でも不十分だということで、この軍転特措法と沖縄振興特別措置法の跡地の規定を一元化して、新たな跡地利用の法律をつくっていく必要があるということで、私はまた 2 回目の跡地利用の担当になるのが平成 22 年度、そこからずっと跡地利用に携わっておりますが、そういった動きがありました。

そのときは県、市町村、土地連、市の地主会、連携して取り組んで、また国会議員や県会議員の先生方、いろんな方の協力を得て、要望がある程度盛り込まれた法律が平成 24 年 4 月に施行された。我々はいわゆる「跡地利用推進法」と言っています。その枠組みを使って、いかに今後の跡地利用を実行していくかというのが課題だと考えております。

その中で、その後、統合計画において那覇軍港施設も 2028 年、またその後と示されているわけ

ですけれども、しっかり計画をつくる。今度はこの跡地利用推進法という枠組みを活用して、いかに具体的な計画づくりをしていくかということが我々に課された課題になっていると思います。

そこで、今日のシンポジウムのテーマでありますけれども、今後の跡地利用を考えていく課題を私なりに考えますと、やはり2つあると思います。

1つは、今日のシンポジウムのテーマでもありますけれども、この跡地利用を沖縄全体の発展にどうつなげていくかということです。これは今日のシンポジウムのテーマそのもののなのですが、これまでの跡地利用を見ても、那覇新都心地区や小禄金城地区は成功事例だと思います。高い経済効果も示されていて、雇用・仕事も生まれているということですから、やはり全体の発展とどう関係していくかということは課題がある。

跡地利用の形が、大規模商業施設と住宅地を配置した開発の繰り返しになっていると、そういったこともある中で、今後の跡地利用は全体の発展を踏まえた上で役割を明確にしていけないといけないだろうということで、そういった指摘を受けて、県としては広域的な観点から跡地利用の方向性を示す必要があるだろうということで、中南部都市圏広域構想を策定したわけです。これは広域構想で方向性を示しただけで、今後、これをいかに具体的な市町村が策定する跡地利用計画につなげていくかという課題があると思います。

もう1つ、2点目が、これは私なりの言葉かもしれませんが、今後の跡地に求めるのは、沖縄らしさかなと思います。一口に沖縄らしさと言っても難しいですけども、先ほど下地先生のほうからも景観が重要だという話がありましたが、那覇新都心の事例を出して申しわけないかもしれませんが、やはり沖縄らしさがどんどんなくなっているのではないかと、全国どこにでもあるような街並みが出現してきたのではないかと意見がよく私の耳にも入るわけです。ということは、なぜかということは今、考えてみると、基地接收前は、戦前は集落があったわけですね。集落があったということは、人が住み、歴史があり、伝統があり、文化があったと。やはり跡地利用を考えると、その歴史、伝統、文化を掘り下げて、次の跡地利用にどう生かしていくかという考える過程、プロセスが沖縄らしさといえますか、地域らしさにつながっていくのではないのかなと思っています。

広域構想の中の1つの柱にも自立型経済の構築、沖縄全体の発展につながるものと、あとは自然環境と歴史、文化の保全、再生による豊かな都市環境の創造も柱に盛り込んでおります。ですから、今日のシンポジウムの冒頭、那覇軍港の歴史というVTRも見せてもらいましたけれども、なるほどそうだなと、やはりその歴史を踏まえて跡地利用にどうつなげていくかということが今後の課題ではないかなと考えています。

今日は県の立場として、こういったシンポジウムに参加させていただいてありがたいと思います。また私の考えなりは、次の段階でまた何か説明できればと思います。よろしくお願いします。

コーディネーター
池田 孝之

ありがとうございます。県で取り組んでいる立場と経験も含めながら、今、略称で「跡地法」と言いましたが、「軍転法」とかそういうのがドッキングされて一元化された、そういう法制度ですね。跡地利用をめぐる法制度の流れの説明をしていただいて、今あるところまでできているということです。これをまたどう活用するかということがあります。その話と同時に、跡利用は全体構想というか広域構想の立場が非常に大事で、個々ばらばらに今まではつくってきて、みんな同じようなものができた。そうではなくて、地域の個性、特性を踏まえながら役割分担、機能分担があるだろうということで、広域的なことを県ももちろん取り組んでいますし、そういった観点から那覇軍港を見ていくと、おのずと機能分担、役割があるのではないかと、こういう指摘だと思います。

そのときに大事な発想は、やはり沖縄らしさというか、その地域らしさですね。地域の持っているもの、特に歴史はかなり重要で、それがしっかり残っていますから、そういうものを手がかりに地域の個性を跡地利用の中に反映していくことが大事ではないかなと、こういうご指摘だったと思います。

それでは、城間市長、よろしくお願いします。

パネリスト
城間 幹子

那覇市長の城間幹子でございます。ユタサルグトゥ ウニゲーサビラ。



私のお話の前に、先に 4 名の方々のお話を拝聴させていただきました。非常に含蓄のある言葉もあり、私もしっかりとメモをさせていただきながら聞かせていただきました。

さて私のほうからは、那覇軍港の概要、先ほど写真もありましたけれども、具体的に面積等をまずお話しさせていただきたいということと、2 つ目にこれまでの那覇市の取り組みと今後の取り組み、そして那覇軍港の跡地利用への期待というこの 3 つの点についてお話をさせていただきたいと思います。

まず那覇軍港の概要について簡単にお話をさせていただきます。

那覇軍港の面積は、先ほど出てきておりますように 55.9ha です。那覇市の市域面積に占める割合は約 1.4%となっております。地主さんの数は平成 26 年 3 月末現在で 1,418 人とこちらでは捉えております。

所有の内訳としては、軍用地 55.9ha のうち国有地が 21ha です。県有地が 3.5ha、市有地が 1.5ha、民有地が 29.8ha となっております。占める割合といたしますと、国有地で 37.6%、県有地が 6.3%、市有地は 2.7%、そして民有地が 53.3%という割合となっております。国有地につきましては、米国の占領後に港湾整備のため米軍が埋め立てた部分が、本土復帰後国有地になったという経緯でございます。

返還に関しましては、昭和 49 年に条件付き返還が合意されて、昭和 25 年 4 月の統合計画で、先ほど来出ておりますように、返還時期は 2028 年度（平成 40 年度）またはその後と発表されております。

次に、これまでの那覇軍港の跡地利用に関する取り組みについてですが、跡地利用計画については、那覇市でも検討し、地主会でも独自に検討されてきたという経緯がございました。そこで平成 7 年度に、20 年前になりますけれども、地主会の計画と那覇市の計画の統一案として基本構想がまとめられております。

その後、12 年前、平成 16 年度から地主会と那覇市との協働・協調体制の構築を目指して、跡地利用に関する検討などを計画的に、また継続的に実施していくための計画づくりに着手をいたしております。

その結果、平成 18 年度には地権者との合意形成の手順に重点を置いた合意形成活動全体計画が策定され、その計画は平成 24 年度には見直しもなされております。この合意形成活動全体計画は、具体的な跡地利用計画や土地活用方法などを決めるものではなく、那覇軍港の跡地利用計画づくりを円滑に進めるため、地権者、市民、関係者の方々との合意形成に向けた一連の活動をまとめた手順書となっております。

この計画に沿って、地権者との合意形成に向けた基礎的体制を整えるため、これまで地主会の方々と跡地利用に関する勉強会を重ねるとともに、平成 25 年度からは次の世代の地主の方々をメンバーとする「那覇軍港のまちづくりを考える次世代の会」を立ち上げ、継続した検討ができる組織づくりを目指してまいりました。

今後の取り組みについてですけれども、今年度、これまでの活動を客観的に評価・検証するため、学識者、経済団体、地主会、国、県、市等で構成する合意形成推進委員会を開催し、ご検討をいただいていたところでございます。

その結果、第 1 ステージの合意形成に向けた基礎的体制づくりの段階から、第 2 ステージの跡地利用計画づくりの段階への移行、つまりステップアップをしてもよいという結論が出たとの報告を受けております。

そのようなことから、これまでの取り組みで合意形成に向けた基礎的体制づくりが一定程度できたものと判断し、本市では次年度より那覇軍港の跡地利用計画づくりの段階に移行し、取り組んでまいりたいと考えております。

最後に、跡地利用への期待についてです。

沖縄県が実施した駐留軍用地の跡地利用に伴う経済効果に関する調査によりますと、既に返還された新都心地区では、経済効果が返還前の 52 億円から返還後は 1,634 億円と 32 倍に増え、小禄金城地区では、返還前の 34 億円から返還後 489 億円と 14 倍に増えているとの結果が出てお

ります。

このように、駐留軍用地跡地の有効利用は、経済効果が増え、沖縄の振興発展に大きく寄与するものというデータとなっております。

また、那覇軍港は空港や港に近く、沖縄の空と海の玄関口とも言える位置にあります。モノレールなどの公共交通機関が充実しているという利便性や市内の宿泊施設のキャパシティ、近接して存在する商業・観光地など、さまざまな点でそのポテンシャルは非常に高く、本市のみならず沖縄県全体の発展に資するような跡地利用が望まれております。

先ほど申し上げた調査では、那覇軍港に関しても経済効果が出されており、その経済効果の試算は返還前の 30 億円から返還後は 1,076 億円、36 倍に増えると試算の結果が出ております。

那覇軍港を取り巻く状況として、最近では那覇空港新国際線ターミナルビルの運用開始、那覇空港第 2 滑走路が平成 31 年度末には整備される予定ですが、このような周辺環境の変化、また今後の周辺環境の変化に柔軟に対応できる跡地利用計画づくり、また本市のみならず、沖縄県全体の発展に資する跡地利用計画づくりに取り組んでいかなければならないと考えております。

そのためには、県や関係市町村が広域的観点から策定しました「中南部都市圏駐留軍用地跡地利用広域構想」、全県民でつくり上げた「沖縄 21 世紀ビジョン」などとの整合性を図る必要があり、また「沖縄 21 世紀ビジョン」を補完、強化、促進させる目的で策定された「沖縄県アジア経済戦略構想」の今後の具体的な取り組み状況を注視する必要があると考えております。

加えまして、先ほどお話を伺いました、この軍港の歴史に目を向けること、それと子どもたちに伝えていかなければならないという、この新たな視点は、私の中にぐっと刺さるものがありました。

以上、私は那覇軍港の概要とこれまでの那覇市の取り組み、今後の取り組み、そして那覇軍港の跡地利用への期待ということで、3 点についてお話をさせていただきました。

これからも皆様方に力をいただきながら、ご協力をいただきながら、市として努めさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

コーディネーター
池田 孝之

ありがとうございました。

城間市長は今日のフォーラムの主催という立場もありますけど、合意形成づくりということでこれまでやってきました跡地利用のこれまでの取り組み、それからさらに単なる跡地利用の形のようなそういう取り組みではなくて、合意形成という非常にソフトなのですが大変重要な部分の段階にここ 3 年取り組んで、それが第 1 ステージという基礎的ないろいろな勉強会、知識の共有から、第 2 ステージという計画づくりのより具体的な作業に入りますということを、今日この場で宣言していただいたということになりますので、大変大事なタイミングだと思います。これから取り組んでいきたいと思います。

それにあたっては、県のいろんな計画も含めて、しっかりこういった整合性もとりながら一緒に取り組んでいきたいと、さらに広域的な視点の中での役割ということも確認していきたいし、最後にやはり沖縄らしさという地域の歴史を含めて、この原点も非常に重要だというご指摘もいただいたと思っております。

以上で 5 人の方の発表が終わりました。私の手元の時計はもう 5 時 20 分で、本当は 30 分ぐらいで終わるはずが、やはり皆さん熱弁を奮っていただいたので、予定の 6 時ちょっと前まではあと 40 分ぐらいしかありませんので、あまり議論できないのですが、まず那覇軍港の特徴は何なのかという確認が 1 つ。それからその特性を生かしながら何ができるかという跡利用の可能性、さらに県全体であったり、中南部全体であったり、そういう役割と 3 つぐらい考えてきたのですが、1 つ 1 つやるととても時間がないのでこの 3 つをばらばらになるかもしれませんが、それぞれ皆さんに問いかけをして、少し答えてディスカッションできればなと。あるところで会場の皆さんに質問をいただきたいと思っております。

私ども、そうは言いながらも那覇軍港の特徴は何なのかというのは、もうずいぶん出ました。先ほどスライドも出ましたので、ほぼもうわかってきたと思うのです。何と言ってもウォーターフロントですよね。

まず、ウォーターフロントをどう生かすかというのは重要で、それから戦災でかなり破壊されたとは言いながら、御物城であったり、対岸にはまた三重城もありますし、いくつかのそういうものが残ってます。そういう文化財、歴史遺産的なものも非常にありますので、これも非常に重要じゃないかと、こういうご指摘がありました。

パネリスト
下地 芳郎

そこで、その活用であったり、ほかにも何か要素がないかということで、例えば下地先生にも聞きたいのですが、県の下地さんも広域的な視点で那覇軍港のウォーターフロントは非常に重要だと。このウォーターフロントは生かさないといけないですね。

先ほど下地先生は、離島のことも含めて考えるべきだとありましたので、ここに波の上にあるクルーズ船が来るような大型バースはできない。機能上そういう場所ではないですね。離島へ行く便は那覇港とか泊港ですから、ここから発着はないですね。また水辺の深さとか、それからビーチ、波の上ビーチとかあるいは宜野湾のビーチとか、そういう砂浜もない。ウォーターフロントといってもかなり制約というか、性格が絞られてくるのではないかと。

そこで、制約というマイナスだけど、それは特徴なので、そういうウォーターフロントでもほかとはさらに違う部分を受けて、どう活用したらいいかというイメージについて、もう少し何かつけ加えていただけないかなと。

これは両下地さんをお願いしたいのですが、まず下地先生のほうから。

ウォーターフロントについては、もう皆さんこれが重要だということに誰も異議がないお話だと思えますけども、今池田先生がおっしゃるように、どういったウォーターフロントですかというふうなところについては、少し議論が必要なのかなと。

これまでの資料を見ても、軍港エリアの中でウォーターフロントというのを考えていますが、もうちょっと広げて考えていけないといけないのかなと。

そういう意味では、今ほかのところでもいろんな計画がありますので、このエリアから強みとして出せるような、そういった少し近場の近海クルーズをつくってみるかとかですね。最近、石垣島では通常のエンジンではなくて、電気で走る船の実験も始まっております。ある意味、世界の最先端のテクノロジーを利用したウォーターフロントのあり方というの、1つ私自身はあっていいのかと思っております。

石垣島で今、進んでいるものが那覇あたりで展開できると、電気で走る船というのは臭いありませんし、振動も音もありません。そうした最先端の新しい発想でできてるようなクルーズ船みたいなものを、どうつくっていくのかは1つポイントだというふうに思っています。

もう1つは、もともと那覇港というのは国場川の下流域にありますので、那覇全体で見ると、あのエリアはエコツーリズムという視点のポイントでもあります。

逆に那覇港から国場川の上流に向かっていくというふうな、そういったカヌーの場所だったり、環境学習の場所としても使えるところですので、そうした環境学習の視点。

3つ目は先ほど申し上げました御物城あたりと連動した形での学習の視点。

ウォーターフロントというと、お店があって、エンターテインメントがあってというふうなところに目が向きがちですが、そうしたところはアジアの中を見てもいっぱいありますから、そういったものとは違う、この地域の特徴を生かしたウォーターフロントという部分を見ていかないと、世界の先進地域、香港、シンガポール、あちこちの事例をそっくり当てはめるというふうなことは好ましくない。ちょっと強いかもしれませんが、そうではないやり方、最初に美というものが那覇をあらわすキーワードであったということであれば、そうした視点からも新しい視点が大事ではないかと。

そういう意味では、近海、慶良間あたりとの連動、もう少し広い視点で捉えていったウォーターフロントの拠点という視点ではないかなと思っております。

コーディネーター
池田 孝之

ウォーターフロントとさらに歴史のそれも加えた上での話ですね。ありがとうございます。では、下地さんどうですか。さっき振りましたけど。

パネリスト
下地 正之

まず中南部都市圏、県が関係市町村と連携してつくった広域構想ですけども、これは那覇港湾施設の位置づけ、コンセプトをこういうふうにとまめています。「沖縄の玄関口にふさわしい交流・交易型ウォーターフロント都市」と、まさにウォーターフロント都市ということです。

期待される産業というのは、リゾートコンベンション産業でありますとか、文化産業とか物流・流通産業とかありますけれども、私が具体的にどの施設というよりは、ちょっとここで私の思いというのを伝えると、やっぱり最初に沖縄に入る玄関口だと、最初に沖縄を印象づけるのがここ

コ－テ－ィネ－ター
池 田 孝 之

なのだと。なので、やはり沖縄らしさとか、景観に配慮したまちづくりであってほしいなと。

先ほど、実は下地先生がおっしゃっていました。船から来る人が、あ、沖縄が見えてきたと、そこで那覇港湾施設が見えてきたときに、往時の那覇港湾施設の街並みが、再現とは言えませんが、現代風につながっていくような街並み、都市景観づくりができればいいのかなと。

那覇空港に降り立った方も、那覇空港から車で 58 号を通過して北部に行くとするれば、最初に出会うまちが那覇港湾施設だということで、やっぱりそこはデザイン性とか、地域の景観、緑地、そういったいろんな景観的な要素にも配慮したまちづくりが重要だと思っています。

先ほど池田先生がおっしゃっていたので、私も西海岸の話に触れますと、那覇空港を降りると、北部まで大動脈で行くと、やはり那覇港湾施設があり、次、キャンプ・キンザーがくる。次、西普天間が見えてくる。次にちょっと上に行くくと普天間飛行場跡地がきて、またインダストリアル・コリドー地区、北谷グスク、北谷桑江南側、全部基地跡地でつながってくるんです。

この基地跡地を開発するときに、今度西海岸地域との連動をどうするかということも大きな課題ではないのかなと思っていて、中南部もいろいろ開発は進んでいますが、せっかく沖縄に来てくれるわけですから、海がある。この空港に近接したところに、きれいな海も実は残っているところがある。そこを大事にしていく。海を何とか連続させていければ、何か中南部沿いの海側というのは途中途切れたりしているし、土地利用の裏側にあるような感じがするので、何とかそれを前面に意識させるような手法はないものかなということ、これは検討しているところです。

ありがとうございます。

本当は下地先生が言った歴史的なものを生かした学習、これは子どもたちのためにとてもいいので、それも発展させたいのですが、時間がないので経済の話をさせていただきます。

これは我那覇会長とか上原さんに聞きたいのですが、沖縄県、那覇の中枢になる、ここはもともと交易・交流、港と空港の接近はこの土地の利点です。だからそれに貿易、交易を含めたその拠点性は当然あって、この経済をアジアとかそういうのに向けて考えていこうと。これはもう次世代の会も考えているわけですね。

これをどう展開していくか。そのときに地主会、地主の方々はどうするのか。ちょっと気になったのは、上原さんに質問をしたいのですが、次世代の会のほうは、ずっと見ていくと最後のほうに「大企業の誘致」みたいなのがあった。これは気をつけてほしい。いろんなところで大企業は大事なのですが、大企業に頼ったらだめですよ。だめですよという言い方は悪いけど、あるところで国際的な企業、国内企業、いい企業が入って一緒にやることは大事なのですが、我々はそれを使いこなすとか、一緒にやっていくという姿勢が大事で、頼らない。そのためには、地元は何かできるか。場合によっては、地主会が事業としてどう展開できるかとか、そういう意気込みとか取り組みも大事だと思うのです。

だから、少し自分たちが事業を展開するような気持ちになって、アジア経済を含めた交易・交流をどう展開したらいいとか、何かその辺、少し上原さんに語っていただけたらと思います。

パ ネ リ ス ト
上 原 政 宏

アジア、世界を含めた経済ということですけども、やはり長く定着する飽きのこないまちづくりというんですか、当然のことながら県内からの集客、国内からの集客、また海外からの集客を見込んで、本当に一過性で終わるのではなくて、流行りもので終わるのではなくて、10 年、20 年、30 年、50 年と続くまちづくり、そしてまた当然、経済効果が大きく期待できるようなまちづくりを持てきたいなと考えております。

確かに、先生がおっしゃる大企業の誘致とかあった。本当に手っ取り早いやり方かもしれませんが、大企業に関して言えば撤退するのも早いですから、頼りっ放しでは実はいかんかなということで、今考えております。どうもありがとうございます。

コ－テ－ィネ－ター
池 田 孝 之

次世代の会も、精力的にいろいろ力も持っているの、人数をもっと増やしていきたいというふうに聞いていますから、ぜひみずから事業を起こしたいとか、こういうところまで情報収集して、そこまで構築されたら、非常に原動力になっていいと思っていますので、期待しています。

では、我那覇会長、経済の発展とか、交流とかその辺の展望です。

パネリスト
我那覇 祥義

経済の話でございますが、自立経済、これは沖縄に欠けていることで、非常に私自身気にしていることでございます。

この那覇軍港は、これが開放されますと沖縄の経済が開くと、今まで閉ざされていた経済が開くという内容で、M I C E 型のコンベンション、これを誘致しようとしたことがございます。

那覇軍港に M I C E が入りますと、経済効果が 400 億の黒字が出ると。この件があって M I C E を誘致して、うちは 2028 年に返還ですから、それを共同使用で早目に黒字のできる公共的なこの事業を添えて、56ha 中の 12ha ぐらい添えて、その間の 2028 年までに残りの我々地主が持っている土地に、先ほど次世代の会が言った大企業の誘致とかおっしゃっておりますが、それと似た感じなのですけれども、こちらに国際の投資を持ってこようということには大変難問があって、その企業誘致するのにも賛同する内容に時間がかかるのです。

ですから、軍港が 2028 年までのその後とって、ほとんど返還されるでしょうに、その間、早目に共同使用をして、それなりのものを見て、そして地主はその残りの土地の活用を返還するまでにしっかりとした企業育成をしていくと、軍港の跡利用をどうしたらいいのかを研究するという考えでどうだろうかという内容なのです。

今グローバルの時代ですから、今おっしゃる観光の件も非常に重要であります。しかし、最初にこれだけの面積の跡地を入れるときは、ご存じのように全てスーパーを入れているのですね。

池田先生は、これを金太郎飴、どこも一緒ということではだめだと、企業というものを先に打ち出して、立地条件は合っていますから、それを検討した上でその期間内にうちの地主が返還という、うちの地主は返還希望じゃないです。その希望でない日米で合意された 2028 年、その後ですから、私たちにはそれは言いませんが、それを返還する想定の間と見て、それを早く知りたいたいということなのです。

コーディネーター
池田 孝之

ありがとうございます。

経済も含めてポテンシャルは非常に高いということは、もう皆さんの意見なので、沖縄県全体の経済発展、振興に資する、これは非常に要だと、これは確かです。

これを 28 年以降まで手ぐすね引いて待っているかという話と、会長は共同使用という 1 つの戦略も立てていくことによって、早目に部分的に実現できたり、企業育成という言葉をおっしゃいましたかね、育てていくことも、戦略として立てることも可能ではないかと、こういうお話だったと思います。

では、ここから会場からのご質問を受けたいのですが、お 1 人ずつ質問を受けて答えると時間がかかりますので、5 人ぐらい手を挙げていただいて、自分の所属と名前をぜひ言っていて、誰に質問かということ、質問もなるべく多くの人に発言していただきたいので、お 1 人、1 つの質問を手短かに言っていいただければと思います。

どうぞご質問ある方。まずは手を挙げていただけますか。遠慮している方が多いようで、もったいないですよ。とりあえずお 2 人、まず向こうの方からどうぞ。お名前と誰にご質問かも含めて、よろしくお願いします。

質 問 者

どうも貴重なお話、ありがとうございます。儀間と申します。2 点お伺いしたいと思います。

まず下地先生と城間那覇市長にお伺いします。

ウォーターフロントの活用については、先ほどいろいろ議論があったのですが、その背後にどのような施設を持ってきたほうがいいのか。下地先生は、エンターテインメントとか、レストランという画一的なものはやめたほうがいいのかというお話がございました。

次世代の会にも、企業の誘致というのがありましたけど、私は言いかえると、いわゆる核となる施設の誘導という言い方を考えた場合に、例えば M I C E を考えているけど、もうそれは与那原・西原に行きました。

高度医療も西普天間に行きそうだとことを考えると、空港に近い、そして水辺にある、そして向かい側には奥武山公園もあるという立地条件を考えたときに、ずばりどういう核となる施設を、例えば医療系がいいとか、観光系がいいということでもいいのか、下地先生と那覇市長が考える那覇軍港跡地に持ってきた施設はどういうものか、今考えているもので、ご紹介いただければありがたいと思います。

2 点目ですけれども、これは県の下地さんにお伺いをしたいのですが、今残されている景観資源

コ－ディネーター
池田 孝之

はわずかだと思いますが、そうすると景観の保持と、次は創造ということになると思うのですが、どうしても跡地利用の手法は区画整理になりますので、どうしても減歩とかが出てくる中で、国有地の活用の仕方がポイントになると思いますけれども、現行制度では、「はい、それは使えます」ということがなかなか難しいと思うのですけれども、景観を創造するということは、緑を増やしたい、あるいは歴史遺産を確保しながら活用していくという方法をする、と、地権者の権利がすごく縮小されるという、いわゆるトレードオフの関係が出てくると思います。何か有効な手法があれば、ちょっと考えている範囲でご紹介いただければと思います。以上でございます。

質 問 者

後半の国有地の話はどなたに質問ですか。

下地さん。ひっくるめて国有地に限らず、景観の立場からでもよろしいです。

コ－ディネーター
池田 孝之

では、お三方にご質問がありましたら、ちょっと今は押さえておいていただいて。もう 1 人の方、どうぞ、質問してください。

質 問 者

仲村渠と申します。下地先生にご質問ですけれども、美としての視点が重要というお話があったと思いますが、具体的にはどういうことかというのと、それと観光だけでは波があるというときに、これは世界的な現象でもあります、観光がちょっとおもわしくないときは、どのような産業を具体的に考えていらっしゃるかということです。以上です。

コ－ディネーター
池田 孝之

お 2 人の質問が終わりましたので、それぞれお名前のご指摘もありましたので、それぞれの方は受け止めて、では下地先生、あとは城間市長に答えていただければと。

パネリスト
下地 芳郎

質問ありがとうございます。最初に池田先生から、今日は第 1 回目で具体的なところはこれからというふうなお話もありましたので、まさに、今日いただいたような質問をこれからいろいろな角度から考えていくということになると思います。

最初にお話のあったウォーターフロントをどうつくるかというふうなことを考えた場合、先ほど歴史的な背景というのもし申し上げましたけれども、より現実的な視点からいくと、今の那覇空港の物流拠点構想というのがありますから、これをどう生かしていくのか。あわせて航空機整備の構想もあるわけですから、こういった港なのですけれども、空との関係でこういった可能性を見出していくのかと。アジアを視野に入れた物流構想ということで、アジアの経済発展がこれからはますます広がっていきますので、そこに沖縄のポテンシャルがあるというのは日本とアジアを結ぶ拠点と。

私も香港にいて 4 年ほど活動して、その後もずっと定期的に観測をしていますけれども、どんどん変化するアジアに対して、この沖縄がどういう役割を果たせるのかというのは非常に大事な視点です。その中でようやく見えてきた物流拠点、航空物流拠点というふうな視点を、このウォーターフロントのエリアの中にどうやって位置づけていくのかというのが一番大きなポイントだというふうに思っております。

あわせてウォーターフロントですから、観光の視点で見ると、当然ながらエンターテインメント、観光は食というのは外せないところですので、食といわゆるエンターテインメント。夜も楽しめるようなエンターテインメントをどうつくるかという視点。

もう 1 つは、これは先ほど御物城のところで教育的な話をしましたけれども、こういった交流拠点といった場合に、だれが交流するかという視点から考えたときに、ここが最適なのか、そのほかの地域が最適なのかという議論はありますけれども、やはり教育拠点というふうなところは、私自身は非常に大事だと思っております。

アジアの人たちとの交流拠点、アジアだけではなくて海外、世界中の交流拠点と。これは歴史的にもかつてそうした時代だったわけですし、改めてこの地域を考えると、教育的な交流拠点というの極めて大事な視点ではないかというふうに思っております。

仲村渠さんから 2 つ目の質問での美の視点、美という部分に関して、あまり私自身が詳しいわけ

コーディネーター
池田 孝之

ではありませんけれども、いろいろな文献を読むと常にこうした言葉が出てきます。これはやはり琉球王国時代に培われたさまざまな伝統工芸だったり、造園だったりというふうなところだと思いますけれども、街並みに、かつてだとよく松の木がいっぱいあって、この松並木の美しさというのが歴史上にはよく出てきます。それをそのまま復元するのがいいということではなくて、やはり緑の復元というのは、那覇にとっては非常に重要な視点だというふうに思っております。

もう1つ観光と、観光だけではなくてというふうなところに私はビジネスリゾートという話もしておりますけれども、「観光って何？」というふうなところなのですね。一般的に観光というのは、レジャーという感覚ですけれども、これもいろいろなところでお話しをしていますけれども、世界的に見た場合のツーリズムというのは、何もレジャーだけではなくて宗教的な移動を伴うものだったり、親戚を訪ねていく、友達を訪ねていく旅だったり、ビジネスを目的とする移動だったりというふうにツーリズムの観点というのが世界の観点ですので、日本でいう、沖縄でいう観光というのは遊びの感覚が非常に強いですから、それを一歩越えたツーリズムの観点から考えた場合に、最初の質問に申し上げました物流拠点を生かした、M I C E もそうですけれども、ビジネスの拠点としてのあり方、かつて沖縄はそうだったわけです。

青い海、青い空のビーチリゾートではなくて、東南アジア、中国とのビジネス拠点、国際ビジネス拠点だったわけですから、それを今の時代に生かしていくというのは、必然のことではないかというふうに思っておりますし、この視点が沖縄観光の次にツーリズムの視点というのが、県民の皆さんの思いを1つにしていけば、沖縄の可能性というのは単なるレジャー、遊びの場としての観光という交流の場から幅広い交流の場になっていくのではないかというふうに強く信じております。以上です。

では、市長のほうから先に。

パネリスト
城間 幹子

今、下地先生からお話がありましたが、それに重ねて私が申し上げることはないのですが、那覇市として跡地利用としてどのような施設を構想しているかということですが、私ども那覇市としては地主会の皆様方のアイデア、それから本日いただきましたいろいろなアイデア等々の調整をさせていただくということで、具体的に那覇市はどんなことを考えていますということは今申し上げられませんが、私的に私がどのように考えているかということをお話しさせていただきたいと思います。

先ほどビデオにて話しましたように、私のイメージする跡地利用のイメージは、「ひと つなぐ まち」を標榜してキーワードとしております。まさに人々がそこで何かとつながって生き生きと活動している場であってほしいというふうに私自身は願っております。

また、先ほど下地先生がおっしゃっていましたが、私も3年間、香港へ行っておりまして、帰ってきたときに絶対に沖縄はハブになれると。いろいろな意味のハブとしてなれるということを確信したのです。物流のハブであったり、人的交流のハブであったり、1つ感じたのが文化のハブであるというふうに思ったことがあったのです。

沖縄は、東アジアに向いての日本の最先端にいます私は捉えています。そういう意味では、日本でありながら沖縄の独特の文化や歴史を持っているこの沖縄が、アジアに向けて、アジアの影響を受けた沖縄として何を今後、発信していったらいいかということ、常々私個人的には考えておりますが、私の考えがどのように今後、皆様方との折り合いの中で語れるかということ、私自身も今後楽しみにしていきたいと思っております。

もう1つの視点は、私は教育現場におりましたので、子どもたちにこの地域の宝を知らせる、こういう価値があるのだということを知らせる学習ツアーをとというときに、ぐっときたんですね。なるほど。新しいものをつくっていくということを我々は考えますけれども、今あるものをどのように残していくかという視点も必要だろうなということを感じた次第です。以上です。

コーディネーター
池田 孝之

ありがとうございました。

それでは、下地さん。

パネリスト

私への質問は、土地区画整理事業の中で景観の創造をどうつくっていくかということと、国有地

下 地 正 之

の活用ということでした。

私はそれを今後、跡地法の活用ということにヒントがないかなと思っております。これまでの跡地利用は先ほど来、話が出ているように、大型商業施設と住宅地の配置の繰り返しということでした。

私も県で区画整理係を担当していましたので感じるのですが、区画整理事業の仕組み上、土地の開発利益を生み出してそこを事業費に充当するという事業構造ですので、どうしてもやっぱり商業地域を配置するということになりがちだと思います。ですから区画整理事業から入るということだと思います。

今度は跡地法では、跡地も最初に広域的な視点からこういった跡地利用を目指すのだという計画づくりをすると、制度として国が拠点返還地として指定する。まさに我々がイメージしているのは、広域構想で方向性を示されたような広域的な観点からの方向性の跡地利用であれば、国が拠点返還地と指定する。そして、広域的な観点からの県の総合整備計画とか、あるいは国の取り組み方針を定めるということが仕組みになっていますので、それを活用する手立てはないのかなというふうに考えます。

西普天間住宅地区も区画整理事業等を活用、換地とか手法は当然区画整理の手法を活用するのですが、そういった大きな枠組みの中で、景観の創造という視点もまちづくりの中にしっかり最初から入れ込むことができるのではないかなと思っております。

また、この跡地利用法では総合整備計画を策定することができるのですが、これは従前の軍転特措法にもありましたけれども、今回、1号追加したわけです。

例を挙げると、総合整備に関することとか、交通、通信、生活環境、農林水産、産業振興、自然環境の中にあと1つ加わったのが「良好な景観の形成に関する事項」というのが、総合整備計画で定めることになっています。ですから、それをこの計画を実行する枠組みができていないか。ただ、これを生かすのは今後の我々の取り組みいかんにかかっているのだと思います。

もう1つ、国有地の活用ですが、これも跡地法の関係で説明したいと思います。平成 11 年にも新たな制度で国有地の活用を要望したのですが、そのときは結局、沖縄振興特別措置法の中の通則の部分、というのはオール沖縄の部分の中で国有財産の活用の規定があるから、その中でできるのではないかなということではあったのです。

しかし、やはり跡地の特殊事情からすると、やっぱり跡地に特化した国有財産の活用というのがあるべきだということを、今回の跡地法の制定に向けても強く要望したところです。跡地法の 25 条の中で、「市や県の総合整備計画に基づく事業で、公共の用に資する施設であれば、政令で無償あるいは地価より低い価格で譲渡、または貸し付けすることができる」という規定が盛り込まれました。ただ、これも計画に基づく。だからこういった計画をつくるかということが重要な視点だと思いますので、今後、それも計画づくりの中で考えていくことになるのかなというふうに感じております。以上です。

コ-ディネ-ター
池 田 孝 之

ありがとうございます。

もう時間になりました。シンポジウムというのは、いつも時間が足りなくなるのですよね。最後のほうで盛り上がってくるのでどうしましょうかとなるのですが、皆さんお忙しい中ではありますが、10 分、15 分ぐらいの延長をお許しいただければ、会場でもう少し質問したいという方がありましたら受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。まだ、質問のある方、いらっしゃいますでしょうか。

今日は皆さん、遠慮深いですね。

たっぷりこちらのほうで議論をしたので、それを酌みとっていただいてもよろしいかと思います。いずれにしても、今日は初回ですので、今後もまた続くと思います。

それでは締めに入っていきたいと思います。私も後でまとめをさせていただきますが、お1人ずつ今日のディスカッションをしての感想なり、最後に言い足りないことがあったらということで、お1人ずつ一言という意味ではないのですが、また、下地先生が最初になりますけれども、お1人ずつ最後の締めの言葉をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

パ ネ リ ス ト
下 地 芳 郎

今日は非常に貴重な機会を与えていただき、ありがとうございます。

いろいろな取り組みを勉強させていただきましたので、私自身もこの問題については、しっかり勉

コ－テ－ィネ－ター
池 田 孝 之

強していきたいというふうに思っております。普段は大学におりますので、私の大きな役割としては、学生にこの問題についても、どう考えてもらうのかというところは大事な視点です。

今日は会場を見ましたら、地主の方と一般の方が大半ということで、私が最初に申し上げた御物城を含めた歴史的な価値を伝えていくということにおいては、やはり小中高、大学生の視点は非常に大事だと思いますので、ぜひ今後、皆様方の議論を大学、沖縄には 11 大学の機関がありますけれども、全ての大学、高等教育機関がコンソーシアムをつくっております。そうしたコンソーシアムの中では、大学生サミットみたいな、それぞれの大学の代表が集まって議論をする学生なりの目線というのもあります。

さらには、さまざまな専門家の方々もいらっしゃいますので、皆さんの取り組みをより幅広く広げていただいて、いろいろな情報をまた寄せていただければ、受け取った若い人たちを含め、さまざまな視点での考えが広がるのではないかとこのように思っておりますので、今後ともぜひよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

では、我那覇会長、お願いします。

パ ネ リ ス ト
我 那 覇 祥 義

今日のフォーラムは、大変有意義でありました。感謝申し上げます。

初回のフォーラムでございますが、これから那覇軍港の跡地について、しっかりとお互いに勉強して、いいものをつくっていききたいということをお願い申し上げます。

最初から私が気にしていたことは、駐留軍の返還の後の跡地利用の問題は、最初に何が入るかという、説明したようにスーパーとか、徳洲会、こういった企業の誘致を占めるんです。それを我々は軍港に、つくるときには何が入るかというのを先に決めないと、面積が大きいだけにこの問題がいつも企業を中心にした考えではなく、沖縄全体の心の優しい話になってしまうものですから、皆さんにお願いしたいことは、軍港という経済のこの箇所を、これを企業がどういったものを持って来たらいいかというのを考えながら、跡地利用の勉強と一緒にしていきたいと、このように申し上げて終わります。

コ－テ－ィネ－ター
池 田 孝 之

ありがとうございます。

それでは、上原さん、よろしく。

パ ネ リ ス ト
上 原 政 宏

今日パネリストとして参加させていただいたのですが、一垣花出身者として、身近に先生方、専門家の方々のいろいろなご意見を聞くことができ、非常に有意義な時間だったと思います。

あくまで私も「次世代の会」の立場としましては、地権者、地主会の補完を行っていくということを念頭に置いていまして、地権者の方々の思い、考え方を十分に理解して、また、同じ視点ではなくて違う視点から物事を考えていきたい。そして、もっともっと私も県内外含めて先進地の視察も積み上げながら、もっともっと地権者に対しての情報、また意見というのを提供できるように、メンバー全員で行っていききたいと思います。

また、重ねて那覇市さんの支援を得ていますので、毎月 1 回の会議を行っていますので、その立ち位置を十分に利用して地権者の方々に本当に役に立つような、次世代の会としてもっていきたいということをお思っております。以上でございます。

コ－テ－ィネ－ター
池 田 孝 之

ありがとうございます。

それでは、下地さん、よろしく。

パ ネ リ ス ト
下 地 正 之

私は長く跡地行政にかかわっている立場なのですが、何をつくるかということはもちろん重要ですが、どのように計画づくりを進めていくかという観点がまた重要ではないのかなと思います。

跡地利用の推進は、もちろん市、県、国、また地主会、また若手会も含めて連携をした取り組みが不可欠だと思っております。

コーディネーター
池田 孝之

また、まちづくりは情熱が必要だと思います。その中で関係者関連、信頼関係、人と人との信頼関係にもつながると思いますけれども、その信頼関係を構築していくことが私の長い経験の中でも、やっぱり人とつながっていると話がうまくここでつながると。先ほど市長が人とのつながりが大事だと言ったことにもつながると思うのですけれども、それが重要ではないのかなと思います。

那覇軍港はこういった跡地を目指すのだというコンセプトがもしつくられれば、そのコンセプトを関係者関連で共有して、必ず実現するという強い思いと、また、跡地利用は粘り強い取り組みも必要だと思いますので、その思いを次世代の方にもしっかり伝えながら取り組んでいくことが大事だと思います。

県としても、那覇市のこれから新たなステージに入って計画づくりをするということですので、関係者と連携をしながらしっかり那覇市の取り組み、跡地利用策定の取り組みを支援していきたいと思っています。以上です。

ありがとうございます。

それでは、城間市長、よろしくお願いします。

パネリスト
城間 幹子

まず、主催者として皆様方に御礼を申し上げたいと思います。大変有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

跡地利用計画づくりを進めていくうえでは、このように多くの地権者の皆様方と行政が相協力していくことが必要だというふうに私どもも捉えております。

この 12 年間の取り組みで得た経験やノウハウ、そして築いてきた信頼関係を大切にしながら、県のご指導、そして識者の方々のご意見も承りながら、地権者との合意形成を図り、協働によるまちづくりのもとに進めてまいりたいと思っています。

先ほど来、お話がありますように、この後、次年度になりますと第 2 ステージへのキックオフということになります。今後とも皆様方のご協力、ご理解をよろしくお願いいたします。本日は、ありがとうございました。

コーディネーター
池田 孝之



ありがとうございました。

それでは、私は役目ですのでまとめを簡単に言わせていただきたいと思います。

たくさんの議論がありましたので、そんなに簡単にはまとまらないのですが、4 点、5 点ぐらいにしますと、1 つは確認ですが、初回という言葉在先ほど何度も言いましたが、今回のフォーラムは初回ではあるのですが、今後も続く。大事なものは地主会を中心にした合意形成というのがベースになっております。この性格は合意形成をベースにした跡利用計画づくりなのです。今まで跡利用は絵を描いたり、こんなのはいっぱいありましたけれども、合意形成が

どうしても残ってしまったり、大事な部分が抜けている。ここをしっかりとベースに置きながら、跡利用計画をつくっていく。これがこの 3 年取り組んだ非常に新しいというか、一番大事な取り組み、今日はその始まりと新たな展開への決意だということが、まず 1 つ確認できたのではないかなと思います。それが 1 点です。

今日は、まずは那覇軍港の特徴は何なのかというところから始めなければいけないので、これはウォーターフロントがあり、それから歴史がある。御物城、屋良座森、さらに対岸には三重城もある。こういうものをどう生かすか、これは沖縄らしさというか、跡利用と言いながらも個性がとても重要なので、そこの手がかりをしっかりやるべきだと。

では具体的にはということで、ウォーターフロントはいろいろな性格もあります。いろいろな違いもあるのだけど、その中では交流とか交易とか、この場のとても重要な部分があります。それから歴史も生かした子どもたちの環境学習もありますので、そういう舞台が大いに今後具体的に詰めていく必要があるかなと思っています。

2 番目には、ポテンシャルといいますか、どの高さというのは経済とか、交易とか、交流とか、

アジア国際まで見た非常に大きなポテンシャルがあって、これをどう生かすかというのは非常に重要なので、物流拠点もあるし、交易の拠点もあるし、そういうものでいろいろな施設が必要になってくるんじゃないかと思っていますので、このような沖縄の経済を担うこの場をどう生かすかというのも、今後非常に重要なことだということが確認されたと思います。

さらに、4 番目は広域的な視点ということで、西海岸の空港から港湾からずっとつながって、さらにキンザー、浦添も含めたそういったところがあります。先ほど質問で、M I C E は与那原に行ったからということでしたが、実は那覇軍港の方々は諦めていないのです。自分たちが本家だと思っていますので、本当の世界的な M I C E をやるとしたらここしかない。そのためにコンベンションセンター・与那原、連携してここが中心になってやっていきたいと思います、そういう意気込みで会長もいますので、M I C E だけじゃないですよ、M I C E も含めたそういうものを展開する場はここが非常に有利だと。そういうことも含めた、ポテンシャルを含めてやっていかないとはいけない。

そのためにも西海岸を含めた連携をしっかりと考えていく必要があるし、役割分担、こういうものも今後ははっきりさせていく必要があるんじゃないかと思います。

最後は、人のことはとても重要なので、地主会、特に次世代の会の活躍は大いに期待したいところなので、ぜひとも自主的な事業展開も含めたいろいろな取り組みをぜひ頑張っていただきたいなと思います。

以上、簡単ではございますが、まとめにかえさせていただきます。

どうも皆さん、お疲れさまでした。

司 会 者

パネリストの皆様、長時間のディスカッション、ありがとうございました。

コーディネーターとパネリストの皆さんに、今一度大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

ありがとうございました。

以上をもちまして、那覇軍港まちづくりフォーラム『沖縄の発展を目指して』の全プログラムを終了いたします。

会場の皆様も長時間にわたり、ご参加いただきまして、イッペー、ニフェーデービル。ありがとうございました。

閉会

以上